

V 研究実施上の問題点と課題

1. 「公共性」を育む学習分野と創造活動、相互の学びの関係

教育課程「学習分野」それぞれで育成する「公共性リテラシー」は『学習における「公共性」育成プラン』作成の過程でほぼ明確になった。子どもたちへの教育効果も表れ始めている。

しかし、学習分野外の創造活動（総合的な学習の時間ほか）における「公共性」にかかわる学びの探究は未着手なので、教育課程全体構造をシティズンシップ教育の視点で示すまでは至らなかった。

そこで、さらに3年間の研究開発申請をしたところである。総合的な学習を視野に入れた「公共性」の実践研究を積み重ねて授業とカリキュラムの改善を続けることが今後の課題である。

2. 「公共性リテラシー」の評価について

私たちは授業の中で、子どもたちが関わりあいながら異質性を尊重して学びあう姿を追求してきた。そのことが、全教師の智恵を集めた『学習における「公共性」育成プラン』に反映されたと言える。

しかし、「公共性リテラシー」の評価の問題を現実レベルで考えるとき、授業中に起きることや子どもの一見ささいなつぶやきにどう対処しているか、何を大切と願ってグループ指導しているかなど、教師一人一人が「公共性リテラシー」を自分の心身でどう捉えているかが問われる。

ここで、3年次に他校から本校に着任した、ある中堅教員の研究感想の言葉を引用して考えてみる。

まず学習観の変化による子どもの学んでいる姿の見取りが変わったことが挙げられる。「公共性」を育む上で子どもに味わわせたい世界として他者との葛藤や試行錯誤する行為があった。これまでの授業では「効率的に○○を習得させる」ことを目指してきたあまり、子どもの葛藤や試行錯誤をマイナスにとらえ、むしろ授業から排除してきたと考えられる。しかし、子どもの学びに寄り添って考えると他者との葛藤や試行錯誤にこそ教育的価値があるのではないだろうかと考えるようになった。

教師がこのような視点で子どもを見つめるようになったことで授業中に子どもにかける言葉やまなざしが変わった。

子どもにしてみれば「評価の声」が変わったのだろう。そうすることで、子どもは他者との葛藤や試行錯誤が繰り返される学びの世界に入っていくことができるようになったと考える。そのプロセスに子どもに気づいてもらいたいことが埋め込まれていたように感じた。

からだの授業では「違いを楽しむ」という視点の学習を組織できたことも成果だった。「みんな同じ」から「違いを楽しむ」という授業に変化してきたことで、「うまい子が主役」の授業から「わたしも主役」の授業へと変わった。

子どもたちは技能差にかかわりなく、苦手意識の強い子も生き生きと授業に参加できるようになったと実感している。

課題としては「公共性」が育まれているという成果を明確に提示することである。この概念は数値で表しきれないものである。教師はその場に参加する者としての主觀で子どもの姿から語るのだが、それだけでは説得力に欠けるのかもしれない。質的分析も活用して成果を語っていけるようにしたいと思う。

(2010年10月の記録より)

ここから導き出されるのは、「公共性」や「シティズンシップ教育」は概念レベルで共有されるだけでは研究として不十分であり、実際の教室での営みの背景にある、私たち自身の民主主義への感覚が鋭敏になってこそ、豊かな教育成果を挙げることができる、ということである。質的な分析や語り合いは、評価のものさしや指標を洗い出す過程として重要であり、自分たちの評価の力量形成に欠かせない。

つまり、子どもと教師のシティズンシップを育む現在の校内研究の在り方にさらなる改良を加えて、「公共性」の評価の指標を明確にすることが、今後の課題である。